ISSN 2434-3072

1930s

1950s

北海道大学150年史 編集ニュース

第 5 号　2020年8月31日

2020s

目　次

〔巻頭コラム〕
沖縄からの「留学生」（後編）
近藤健一郎 …… 2
〔北大歴史ノート 第５話〕
100年前の受験生活 …… 4
〔北大風景グラフⅤ〕
中央食堂の周辺 …… 5
〔資料紹介〕収蔵庫さんぽ …… 6
〔活動紹介〕展示preview …… 7
〔編集後記等〕 …… 8

〔巻頭コラム〕

沖縄からの「留学生」（後編）

近藤 健一郎
（教育学研究院教授）

前編においては、1958年の『琉球新報』記事3点により、北海道大学が沖縄出身の学生を介してどのように報じられていたかを紹介した。それを受け、この後編では、第二次世界大戦後アメリカの占領下に置かれていた沖縄から北海道大学へ入学した「留学生」と入学のしくみについて論じることとしたい。

＊＊＊

年度ごとに刊行されていた『北海道大学一覧』には、学内の諸規則と並んで、学部ごとに学生・院生の出身県別一覧にとどまらず、氏名や入学年が記載されている。それを手がかりに、沖縄出身学生を確かめてみよう。

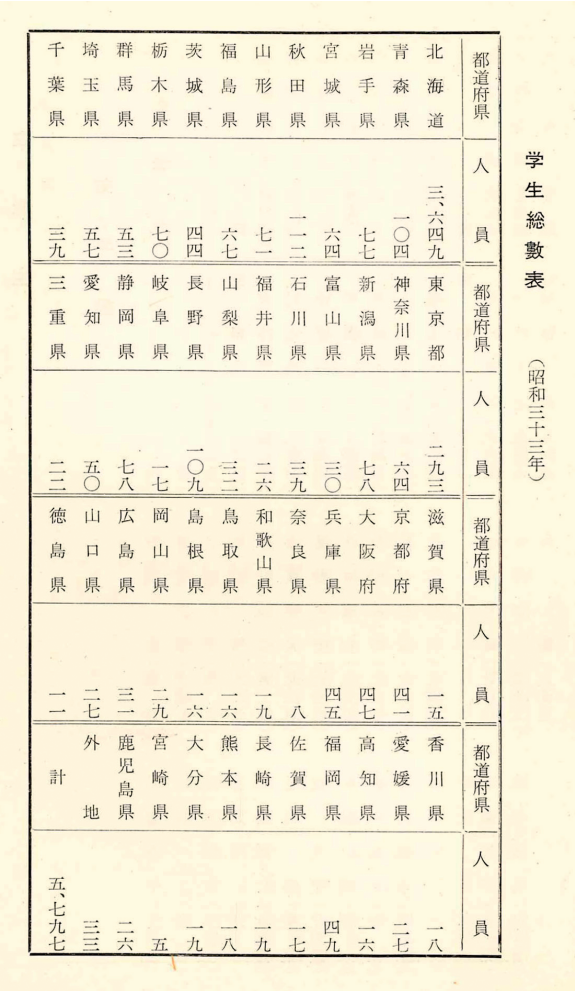
沖縄は、第二次世界大戦後、日本の施政権外にあった。そのため、『北海道大学一覧』の「学生都道府県別調」において、沖縄出身者は中華人民共和国出身者などと並んで外地出身者として統計的に把握されていた。たとえば、1958年度の農学部には外地出身者が3名在学していることとなっており、学生名簿と照らし合わせてみると、その内訳は沖縄出身者1名と中華人民共和国出身者2名であったことがわかる。なお、理由は判然としないが、この年度については理学部のみ外地とは別に沖縄という区分を設けていた（その前後の年度では、理学部も沖縄出身者を外地出身者として計上している）。

このように、『北海道大学一覧』により、前稿で紹介した8名の沖縄出身の学生・院生が1958年の北海道大学に学んでいた足跡を確かめることができる。この調査によれば、もう1名薬学を学ぶ沖縄出身学生も確かめられる。この学生が、前稿で紹介した座談会に出席した沖縄出身学生に同胞として把握されていない事情には、その方の生まれ育ちや北大への入学方法などが考えられるが、仮説の域を出ない。

＊＊＊

沖縄は、1943年に師範教育令の改正により、他府県の師範学校同様、専門学校相当の官立とされた沖縄師範学校を除き、第二次世界大戦敗戦まで高等教育機関が設置されなかった唯一の県であった。そうしたなかで、札幌農学校や北海道帝国大学を含む日本各地や台湾などの高等教育機関に進学する沖縄出身者がいた。

第二次世界大戦後の1950年、米軍政府が所管する琉球大学が設置された。琉球大学は、沖縄にとってはじめての大学であった。そのような琉球大学設置以前の1949年に米軍政府（の



学生総數表（昭和三十三年）

都道府県	人員	都道府県	人員	都道府県	人員	都道府県	人員
北海道	三、六四九	東京都	二九三	滋賀県	一五	香川県	一八
青森県	一〇四	神奈川県	六四	京都府	四一	愛媛県	二七
岩手県	七七	新潟県	七八	大阪府	四七	高知県	一六
宮城県	六四	富山県	三〇	兵庫県	四五	福岡県	四九
秋田県	一一二	石川県	三九	奈良県	八	佐賀県	一七
山形県	七一	福井県	二六	和歌山県	一九	長崎県	一九
福島県	六七	山梨県	三二	鳥取県	一六	熊本県	一八
茨城県	四四	長野県	一〇九	島根県	一六	大分県	一九
栃木県	七〇	岐阜県	一七	岡山県	二九	宮崎県	五
群馬県	五三	静岡県	七八	広島県	三一	鹿児島県	二六
埼玉県	五七	愛知県	五〇	山口県	二七	外地	三三
千葉県	三九	三重県	二二	徳島県	一一	計	五、七九七

学生都道府県別調（1958年）

沖縄出身学生9名は「外地」出身者33名に算入されている（『北海道大学一覧　昭和三十三年』1958年、733頁）

ち米国民政府）との契約によって、日本各地の大学に進学し、学資や生活費等の支給を受け、卒業後は沖縄で専攻を活かした職に就くという契約学生制度が開始された。沖縄住民側の中央政府である琉球政府が1952年に設置されるや、契約学生制度は廃止されるものの、代わって琉球政府からの要請により、日本政府文部省は「公費琉球学生」（1955年から国費琉球学生、1959年から国費沖縄学生に改称）制度を1953年から実施した。この制度によって、沖縄からどのように日本各地の大学へ入学するのか、順にたどろう。

沖縄から日本各地の大学への入学希望者は、規定の方式で出願したのち、琉球育英会と沖縄に置かれた日本政府南方連絡事務所が共同して実施する選抜試験を受ける。文部省は試験成績に調査書等を加味して、募集定員（1961年に増員されるまで全専攻あわせて50名）の学生を選考するとともに、事前に協議しておいた各大学へ選考された学生を募集定員の枠外として入学させるのであった。この制度に基づく学生は、特定の専攻を希望するものの、特定の大学を志望することはできなかった。そして大学入学後は、授業料免除のほか、学資の支給を受けたのであった。また国費制度と並んで、1955年からは「自費琉球学生」（1959年から自費沖縄学生に改称）と呼ばれる、授業料免除や学資支給はないものの、国費と同様の選考を経て日本各地の大学に入学できる制度も設けられた。（沖縄県教育委員会編・発行『沖縄の戦後教育史』1977年参照）

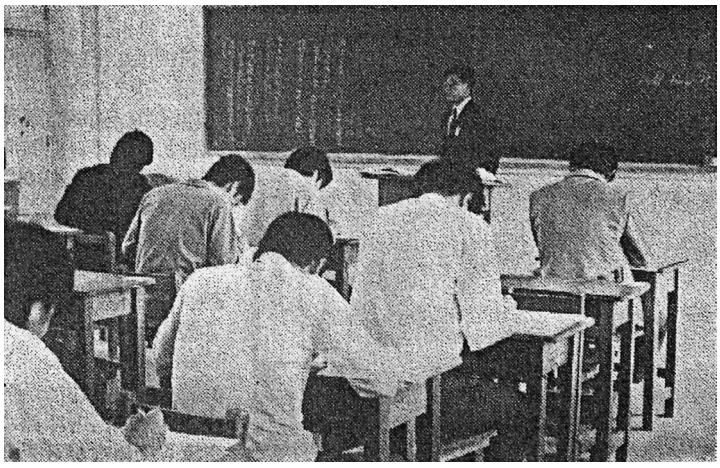
ここで、琉球育英会の後継団体である沖縄県育英会が1977年に発行した『奨学生名簿』をたどると、座談会記事で名前の挙がっていた8名の学生・院生について、5名が国費学生、1名が自費学生であったことが確かめられる。なお1名については不明であるが、筆者による調査漏れも否定できない。また大学院生であった1名は契約学生として大学を卒業したのち進学し、民間の奨学団体に選考されて大浜奨学生となっていたことが確認できる（大学院生に対応した国費制度が設けられたのは1961年であった）。この大学院生であった金城俊夫氏は、琉球大学教授となったのち、岐阜大学教授へ異動し、岐阜大学学長も務めた。

このような入学のしくみのもと、「国費と私費を合わせ、72年までに60人」の沖縄からの「留学生」が北海道大学に入学したのであった（北海道大学『北大の125年』2001年）。

＊＊＊

1972年5月15日、沖縄は日本の一県に「復帰」した。この1972年度をもって自費学生制度、そして1980年度をもって国費学生制度は終わりを告げた。それ以降、沖縄県の高校生が大学進学する場合は、原則として他県の入学希望者と同一の試験による方法となった。

今年度（2020年度）、北海道大学は、沖縄県の高等学校を卒業した20名の学生を迎えた。



八重山試験場における受験風景（1971年）

典拠：
「琉球育英会及び国費沖縄学生制度の存続」（『文教時報』126号・39頁・琉球政府文教局総務部調査計画課・1972年1月／『復刻版文教時報』第18巻・不二出版・2019年所収）

北大歴史ノート　第５話
１００年前の受験生活

「札幌農大奮闘の記」

1917年8月発行の受験雑誌『中学世界』に、「札幌農大奮闘の記」と題する手記が掲載されている。これは、北大（当時は東北帝国大学農科大学）附属の「大学予科」への受験体験記である。

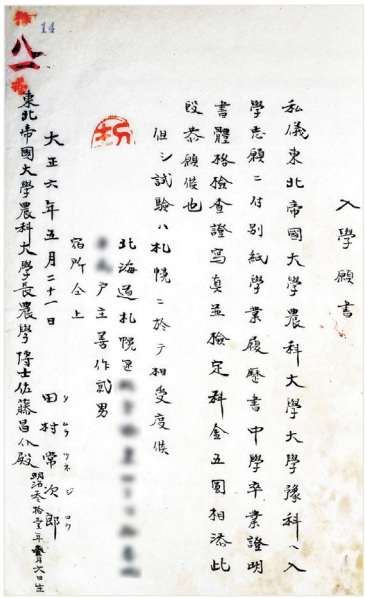
当時、大学への進学は、中学校卒業後に高等学校や大学予科を経ることを原則とした。大学予科入試は、実質的な北大の入学試験であった。

受験勉強

体験記は1917年3月の中学校卒業から始まり、「之からが愈々（いよいよ）奮戦」と意気込みが綴られている。大学予科の学年暦は、6月末入試、9月入学であった。3月の中学校卒業後、4～6月が本格的な受験準備の期間となった。体験記の筆者は「蝦夷の男子」と名乗るが、受験番号などから、北海道庁立札幌第一中学校（札幌南高等学校の前身校）を卒業した田村常次郎と推定される。

4月は、1日10時間、数学や英語を中心に勉強したようだ。主に教科書を復習しつつ、数学では、藤森良蔵による「代数幾何三角」（藤森『学び方 考へ方と解き方』シリーズと思われる）を参考した。英語では、南日恒太郎『和文英訳法』、間崎勝義『英文は斯の如く和訳せよ』、佐川春水『正則英作文』などの参考書を利用した。

5月中旬には、1日12時間の勉強をした。5月22日に願書を提出し、翌々日に受験票が届く。80番台と若い受験番号に驚きつつ３で割り切れるのは縁起がいいと喜ぶ。


入學願書

私儀東北帝國大學農科大學大學豫科ヘ入學志願ニ付別紙學業履歴書中學卒業證明書體格檢査證寫真並檢定料金五圓相添此段奉願候也

但シ試驗ハ札幌ニ於テ相受度候

北海道札幌區[illegible]
[illegible]戸主[illegible]作貳男
寄附金上

大正六年五月二十一日

田村常次郎

東北帝國大學農科大學長農學博士佐藤昌介殿

田村常次郎が提出した入学願書

5月下旬はいよいよ勉強に熱が入り、5月25日の勉強時間は以下のように13時間となった。

8～12時　代数、物理20ページ暗誦
13～17時　和文英訳30題、英文和訳12ページ
17～20時　三角方程式20ページ
20～22時　平面幾何3年次後半の復習

6月からは物理を重点的に進め、6月10日までに受験準備は整った。

試験当日

初日の6月21日、大学構内の体操場で受けた体格検査には、「二十五位にも見える」受験者もいた。合格者109名の願書が綴られた「大学予科入学願書」（1917年7月、帝大簿書№0179）に拠れば、年齢は、17歳4名、18歳18名、19歳29名、20歳29名、21歳17名、22歳6名、23歳3名、24歳2名、25歳1名と幅広かった。

募集人数100名に対して志願者370名と聞いていたが、「室に入つて見れば案外淋し」かったという。北大は、札幌のほかに東京にも試験場を設けており、例年、受験者の8～9割が東京を選択したとみられる。この年も、前述した109名の受験希望地別の内訳は、札幌20名、東京88名、不明1名であった（前掲帝大簿書№0179）。

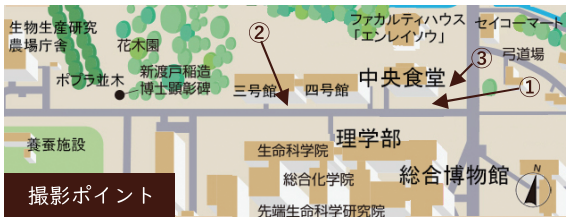
学科試験は、6月23日から4日間実施された。試験場へ向かう途上、中学校の恩師に激励され士気が高まる。数学は藤森の参考書に類似した問題があり、作文は中学校で練習しており、漢文は2題とも教科書の通りと、大きな失敗もなく十分な手応えであった。英語も、例年かなり難解な単語が出題されると警戒していたが、あまり手強いものは見えず、少々不安ながらもなんとか解答できたという。

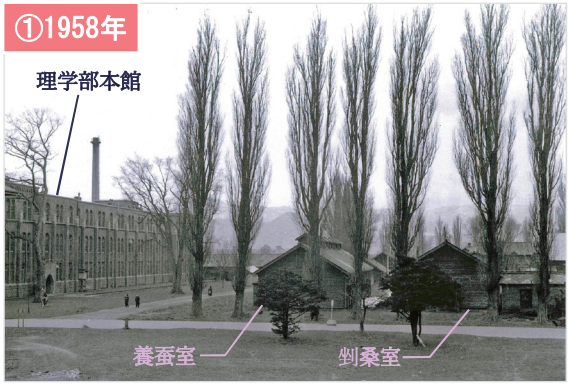
合格発表

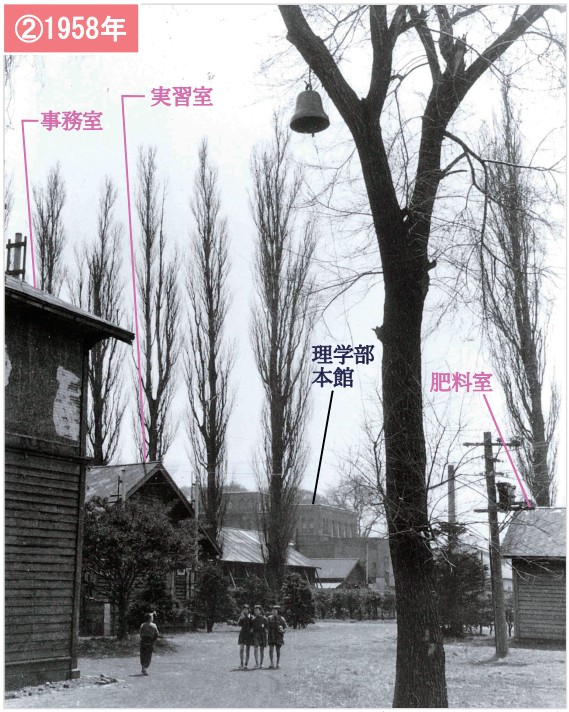
7月2日、郵便配達夫の声を待ちわびて受け取ったのは合格の報であった。生涯通じて「最も愉快な事であらう」と喜びを綴り、9月から被る大学予科の丸帽に思いを馳せる。そして、後輩たちへ向けて、中学校の復習を焦らずやっていくこと、「試験パツスの妙法は之れだけ」と記して文を締めくくった。

（廣瀬）

北大風景グラフV
中央食堂の周辺







（佐野善一郎氏提供）

（2020年7月24日撮影）

中央食堂や理学部三号館、四号館が建つ北11条西8～西9丁目には、かつて「第一農場」の施設が並んでいた。

第一農場は、畑・水田・果樹園での作物の栽培、家畜の飼育、畜産製造、養蚕などの研究・実習をおこなう札幌農学校の実験農場であった。当初、農場施設は現在の附属図書館本館から古河講堂・経済学部あたりに位置していたが、北1～北2条西1～西2丁目のキャンパスからの移転(1903年)に伴い、現在の中央食堂からポプラ並木に至る敷地に移った。一帯には、1904年から1905年にかけて、穀物庫、家畜舎、製乳所、養蚕室、実習室などが建ち並んだ。

写真①、②は佐野善一郎氏が1958年に撮影した第一農場の風景である。写真①は中央道路の東側からの眺望である。農場敷地の東側に集まっていた養蚕関係の施設のうち、屋根に採光窓を備えた養蚕室と、剉桑室（ざそうしつ）（若い蚕に与える桑を刻む施設）が見える。写真手前を南北に横切る中央道路沿いにはポプラが植えられていた。左手には、1929年に建てられた理学部本館（現在の理学部本館・総合博物館）の北棟も写っている。

写真②には「エルムの鐘」の下で遊ぶ子どもたちが写っている。現在の理学部三号館の北側からの撮影で、農場施設群のほぼ中央に位置していた事務室周辺の風景である。写真奥には、理学部との間の道路沿いに、東西にかけて植えられていたポプラが見える。

第一農場の各施設は、1968年から1970年にかけて、主にポプラ並木の西側へ移転し、各建物が新築された。蚕飼育室(1961年新築)など、新たな養蚕施設では現在も数千頭の蚕を飼育している。

一方、農場施設の跡地には、理学部三号館（1972年新築)、中央食堂(1977年新築)、理学部四号館(1978年新築)が次々と建てられた。さらに、1995年には中央食堂の北隣にファカルティハウス「エンレイソウ」が建った。

写真③は、現在の中央食堂の前景である。中央道路沿いのポプラは空洞化で倒木のおそれが生じたため、2002年に伐採された。緑に覆われた切り株は、その名残である。　（佐々木）

〔資料紹介〕 収蔵庫さんぽ

理学部動物学科の臨海実習資料

学部・学科・講座等の各学内組織から、各組織の沿革や学術史を示す資料を大学文書館にお寄せいただいています。2019年12月23日には理学研究院多様性生物学分野から、山田眞弓博士(1923－2018)の旧蔵資料を受贈しました。

山田博士は、理学部動物学科を1945年に卒業し、海産無脊椎動物の一種であるヒドロ虫類の分類学的研究をなされた生物学者です。理学部生物学科動物学専攻動物学第一講座(後に動物系統分類学講座)の第2代教授（1962～1986年）を務めました。動物学科の必修科目である臨海実習も担当し、厚岸臨海実験所を実習地として、海中や磯の生物を採集していました。

山田博士の旧蔵資料には、1960～1970年代の厚岸臨海実験所での実習の日誌があるほか、厚岸臨海実験所の外観や水族室など内部の様子、磯や船上での採集時の写真などが貼られたアルバムもあります。 (佐々木)

厚岸での採集実習（1955年頃）

1970年代学生生活の写真

2019年11月から2020年4月にかけて、黒井光久氏（工学部1974年卒業）より、在学期資料73点をご寄贈いただきました。その中には写真資料（画像）も含まれており、1970年代の大学構内や、教養部でドイツ語を教えていたビュルベッケ夫妻宅でのジンギスカンパーティー、黒井氏が所属していたチルコロ・マンドリニスティコ「アウロラ」の演奏旅行などが写っています。

第三サークル会館を1973年10月に撮影した写真では、1階の窓に「北大交響楽団」の掲示が見えています。

会館建物は、もともと大学の「附属土木専門部」（1918～1949年）の本館として1929年に建てられたものです。1957年から1969年までは教育学部が使用していました。その後、サークル会館として「アウロラ」や北大交響楽団など、音楽系の学生団体が共同で使用し、1981年に取り壊されました。 (佐々木)

第三サークル会館（1973年10月）
会館跡地には地球環境科学研究院研究棟が建っている

〔活動紹介〕 展示 preview

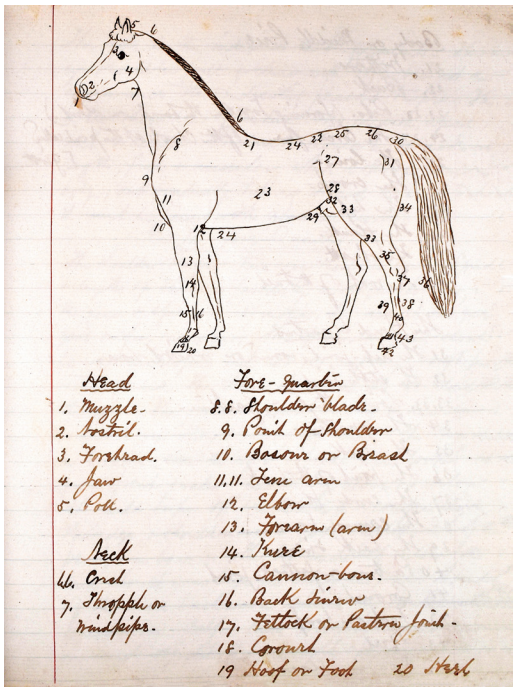
2020年度の大学・地域行事（6月大学祭、7月カルチャーナイト）における特別企画展示「ノートの中の“画伯”たち」は、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、次年度以降に開催を延期しました。展示を予定していた資料の一部をご紹介します。

ノートの中の“画伯”たち

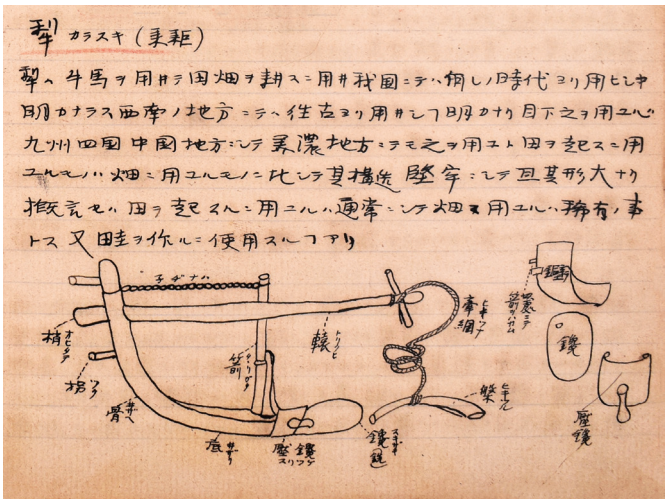
大学文書館では、札幌農学校期の受講ノート約270冊（農学、農業経済学、農芸化学、動物学、植物学、土木工学、水産学等）のほか、旧制大学期の受講ノート（農科大学1910年卒業の中島九郎、工学部1933年卒業の石川長壽、医学部1935年卒業の渡辺左武郎によるノート等）や、新制大学期の受講ノート（農学部1960年卒業の四方純子によるノート等）を保管しています。

受講ノートの中では、講義での掛図や参考書を緻密に模写した図や、動植物のスケッチ図、実験装置の模式図、あるいは落書きも登場します。

企画展示では、札幌農学校期に焦点をあてて、学生生活の軌跡をたどる予定です。



廣井勇のノート「牧畜学」の馬図（1880年）
W.P.ブルックスの講義を受けた廣井勇（札幌農学校2期生、1881年卒業）のノート。牧畜の総論を述べた後、牛、羊、馬の品種ごとの解説が続く。



西田藤次のノート「農具論」の犁（からすき）図（1896年）
南鷹次郎教授（札幌農学校2期生、1881年卒業）の講義を記した西田藤次（同17期生、1899年卒業）のノート。耕起、播種、肥料散布、除草、収穫、脱穀等に用いる人力・馬力の農機具について記されている。犁は、牛馬にひかせて田畑を耕す農機具。

（廣瀬）

編集準備室日誌

大学文書館では、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、「北海道大学の行動指針（BCP）」のもとで業務にあたっています。4月～6月は臨時休館となり、当室もご来室いただいての受付を休止しました。室員は、勤務をシフト制とし、これまでにご寄贈いただいた資料の整理、電話やメールによるお問い合わせへの応対、本誌編集、展示へむけた資料調査等の業務をおこないました。

今後の開館・開室状況も、BCPの制限レベルに応じて変更となる見通しのため、随時ホームページにてお知らせいたします。電話、メール、郵便でのお問い合わせは、引き続き承ります。

資料の収集・保存にご協力を

探しています　クラス雑誌

教養部の組（クラス）に編成された学生たちは、自己紹介、学生生活の所感などを編んだ文集を手作りすることがありました。

『スマタポポヒ』創刊号

1962年度1年20組（理類）のクラス雑誌で、誌名はラテン語由来のカバの英名Hippopotamus（ヒポポタマス）を逆さまにしたもの。卒業後も2号（1981年発行）～7号（2016年発行）が刊行されている。

『あごら』1～3号　今村秀之氏寄贈資料

1962年度1年1組（文類）のクラス雑誌。

上記のほか、1958年度1年12組（理類）『Ἀγόρα（アゴラ）』1～13号、1961年度1年7組（理類）『霧』創刊号、1962年度1年3組（文類）『曙光』創刊号、1974年度1年7組（文類）『あぶさんと』1～2号等を所蔵しています。

編集後記

◇巻頭コラムは、前号掲載の後編として、近藤健一郎教授に、沖縄からの「留学生」制度を解説していただきました。

◇中谷宇吉郎の生誕120年を迎えた2020年。中谷が世界初の人工雪を製作した常時低温研究室から、後身の低温科学研究所への変遷を表紙でたどりました。

表紙図版――低温科学研究施設の遷り変わり

- 1935年、大野池南側に建てられた常時低温研究室（1930年代後半、土佐林義雄撮影）
- 1941年、理学部本館の東向かいに新築された低温科学研究所（1950年代後半、創基80年記念撮影）
- 1968年、北19条西8丁目に移転した低温科学研究所（2020年7月）

北海道大学150年史編集ニュース　第5号

発行日　：2020年8月31日

編集・発行：北海道大学150年史編集準備室

〒060-0808

札幌市北区北8条西8丁目

北海道大学大学文書館内

開室日　：平日（月～金）9:30～16:30

（祝日、年末年始12/29～1/3を除く）

TEL/FAX　：011－706－2395

E-mail　：hu150@archives.hokudai.ac.jp

URL　：https://www.hokudai.ac.jp/bunsyo/hu150.html